

初年次修了を迎える大学生は レポート課題に対してどのような作成プロセスを描くか

久保田 一 充
KUBOTA Kazumitsu

1. はじめに

学修の過程で取り組む「レポート」というものは、2つの観点で捉えることができる。まず、レポートは「文章」である。これに取り組む際には、語彙力、構成力、論理性などの言語運用能力が問われる。一方で、レポートは「課題」でもある。これに取り組む際には、課題理解力、計画力、情報収集力、分析力などの課題解決能力が問われる。レポート課題を解決する能力は、レポートという文章が出来する前提であり、重要度が高い。

だが、言語運用能力に比べて、課題解決能力を把握することはむずかしい。文章の完成度は、教員の手元にあるレポートというプロダクトから、見える。一方で、レポート提出に至るプロセスは、見えない（見えにくい）。文章のなかで言語運用能力の現れ（例：論理性の問題）とみなしていた部分が、実は、課題解決能力の現れ（例：情報収集力の問題）という可能性もある。


以上のとおり、学生がレポート課題を解決する能力は、見えない（見えにくい）ものだが、文章の完成度を左右する重要な能力であり、教員はこれを調査・研究して、把握しておく必要がある。筆者の所属する初年次教育部門では、部門独自の受講アンケートをとおして、初年次生の学修成果を調査しているが（本誌収録の「日本語表現1」「日本語表現2」受講アンケート集計結果参照）、その調査では、レポート作成プロセスを断片的に取り出して確認しており、学生の思考のなかにある連続的な作成プロセスの全体像が見えてこない。

初年次修了を迎える大学生は、レポート課題の提示を受けてから提出のゴールに至るまで、どのような道のりを理想として描き、しかし現実にはどう進むのだろうか。本研究は、初年次修了を迎える大学生のレポート課題に対する解決能力を把握する目的で、レポート作成のスク립ト的知識を調査し、また、その知識のうち大学入学後に獲得したものを特定することで、初年次生の学修到達点を明らかにする。知識面の解明に加えて、スク립トを実現する能力も明らかにし（知識があり実行もできるか、知識はあるが実行できないか、知識すらないか）、課題解決能力の詳細な把握をめざす。それらの結果をふまえて、学生の現状と課題を共有し、2年次以降の教育

における指針を示す。

2. 調査概要

初年次修了を迎える大学生のレポート課題に対する解決能力を調査するため、下記のとおりアンケートを実施した。2023年1月、本学で筆者が担当する1年次後期開講科目「日本語表現2」の授業第15週（最終週）に、受講生にアンケート用紙を配付し、設問への回答を求めた。用意した設問のうち、本稿の分析に直接関係するもののみ、以下に(1)~(6)として引用する。なお、設問で設定した「レポート課題」は「「若者」と「遊び」について、自由に論じなさい。（字数：4,000字程度 締切：1ヶ月後）」である。

- (1) 下記のレポート課題が提示されたとします。これを受けて、あなたは「まずこれをして、次にこれをして、そして……」というような作成プロセスとして、どのような流れを思い描きますか。あなたのレポート作成経験をふまえて、また、「本当はこういうこともできるとよかった」という反省もふまえて、レポート提出までに必要なプロセスをできるだけ細かく、図示してください。
- (2) [筆者注：(1)の図示において] 各プロセスを実践する際に利用する具体的な手法や手段（例：図書館を利用する）が思いつくようであれば、それも明記してください。
- (3) [筆者注：(1)の図示において] 各プロセスについて、なぜそれをするのか、その理由をこの欄で説明してください。どのプロセスに対する説明かを明確にするために、波矢印（）を引いて結びつけてください。
- (4) 左記のプロセス [筆者注：(1)で図示したプロセス]のうち、「大学生になってから意識するようになった」ところはありますか。該当する箇所を、青色の線で囲ってください。（複数回答可）
- (5) 左記のプロセス [筆者注：(1)で図示したプロセス]のうち、これまでのレポート作成経験のなかで「(あまり)実践できていない」ところはありますか。該当する箇所を、赤色の線で囲ってください。（複数

回答可

- (6) 「若者」と「遊び」についてレポートを作成した経験はありますか。または、「若者」と「遊び」に関する講義の受講経験があるなど、現時点で、このテーマでレポートを作成するための専門的な知識がありますか。下記の選択肢のなかで教えてください。

(複数回答可)

- ① このテーマでレポートを作成した経験がある
- ② このテーマでレポートを作成するための専門的な知識がある
- ③ どちらもない

アンケートの回答のうち、分析対象としたのは、研究目的での結果公表の許諾が得られ、かつ、「課題」のテーマに関するレポート作成経験も専門的知識もない（設問(6)の③の回答者）、51名の回答である。なお、この51名は文学部国文学科の学生である。

3. 調査結果と考察

学生が思い描くレポート作成のストーリーと、作成プロセスの実情とを報告する。まず前者について、設問(1)の回答として学生が記述したレポート作成プロセスと、各プロセスの記述者の割合とを図1に示す。

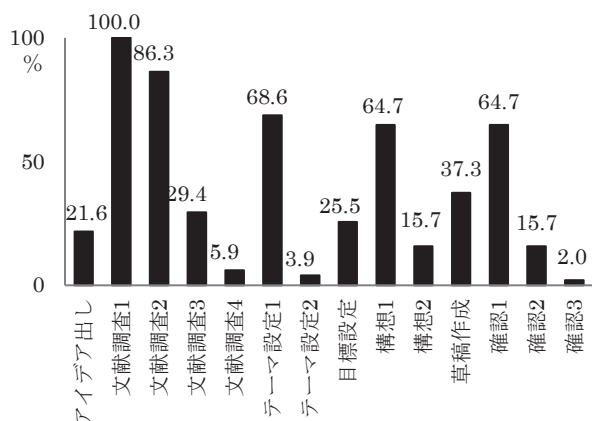


図1 学生が記述した作成プロセスと、記述者の割合 (N=51)

結果の分析に移る前に、作成プロセスの分類について説明しておく。レポート作成の一般的なプロセスである「(テーマについて理解するための) アイデア出し」「文献調査」「テーマ設定」「(レポート内容の) 目標設定」「(レポート内容の) 構想」「草稿作成」「(提出に向けての) 確認」の7種類に、学生が記述した各プロセスを対応させて集計をおこなった(注1)。学生の記述で、同じ種類のプロセスが段階性をもって展開されていた場合は、「文献調査1」(段階1)、「文献調査2」(段階2)などと細分化して集計した。この7種類以外(「整理」「読解」「アンケート調査」「考察」「(草稿作成ではない) 執筆」など)は集計対象から除外した(注2)。

図1の結果の分析に移る。図1の結果から、大半の学生のレポート作成ストーリーには「2段階以上の文献調査」「テーマ設定」「構想」「確認」が含まれることが分かる。作成プロセスのうち最も多層的である「文献調査」については、8割以上の学生が2段階以上の調査を想定しており、そのなかで、2段階の調査を想定する学生が最も多い(図2)。

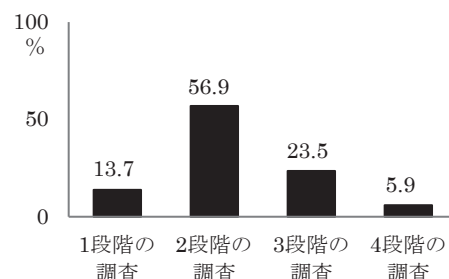


図2 文献調査の段階数と、記述者の割合 (N=51)

複数段階の文献調査において、学生はどのようなプロセスを経ているのだろうか。これを探るために、学生の記述から、各段階における文献調査の対象を確認した。その結果を表1に示す。この結果から、複数段階の文献調査は、より広い範囲からより狭い範囲の調査へ、より一般的な情報からより専門的な情報の調査へ、理解するという目的から論証するという目的の調査へ、という流れが読み取れる。これは例えば、文献調査の段階1で「ネットなど」を見渡してテーマの概要を知り、そのうえで、段階2以降では「論文など」の詳細な情報の探索、また、「根拠など」の論証のための探索に移るということである。学生の知識として、効率的な文献調査のスキプトがあることが分かる。

表1 文献調査の対象と、各段階における記述者の割合

調査対象	調査1 (N=51)	調査2 (N=44)	調査3 (N=15)	調査4 (N=3)
辞書など	15.7%	0.0%	0.0%	0.0%
ネットなど	56.9%	9.1%	0.0%	0.0%
新聞など	19.6%	9.1%	6.7%	0.0%
図書など	43.1%	40.9%	40.0%	33.3%
論文など	27.5%	63.6%	60.0%	33.3%
根拠など	0.0%	22.7%	26.7%	100.0%

※辞書など：辞書、辞典、定義、意味

※ネットなど：インターネット、Google、Yahoo!、Web

※新聞など：新聞、記事、ニュース

※図書など：図書、書籍、本、図書館

※論文など：論文、CiNii、研究

※根拠など：根拠、証拠、裏づけ、反論などの論証目的の資料

文献調査の多層性は、多くの学生にとって大学入学後の学修成果である。図3に設問(4)の集計結果を示す。集計作業では、特定のプロセスを記述した学生の数を母数として、そのプロセスを「大学生になってから意識するようになった」と回答した学生の割合を算出した。

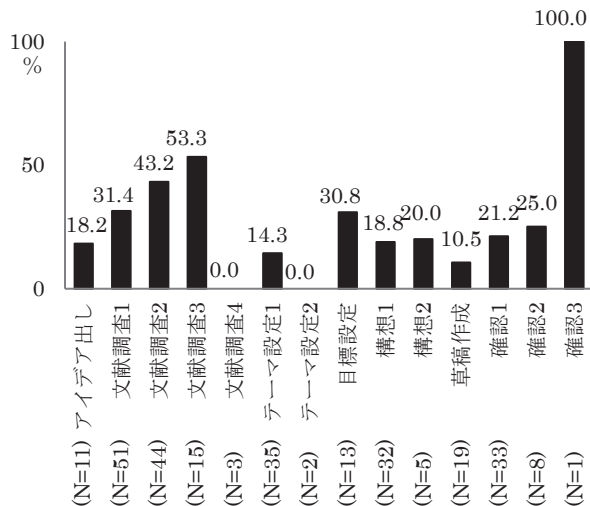


図3 「大学生になってから意識するようになった」プロセスと、回答者の割合

図3の結果から、7種類のプロセスすべてにおいて、一定数の学生の、大学入学後の成長が見てとれる。そのなかでも特に「文献調査」の成長が顕著であり、大学での学修の過程で、学生の文献調査は（意識上は）より多層的なものになったということである。この結果を、先の表1の結果と照らし合わせると、大学での学修のなかで学生がより専門的な情報収集ツール（論文検索サイトなど）を獲得し、それと従来の一般的なツール（Googleなど）とを単に取り換えるというのではなく、両ツールの特性を理解して使い分けを意識するようになった、ということだと分析できる。また、「文献調査」の成長には、論証に関する意識変化も関係するだろう。本稿冒頭で触れた「受講アンケート」では、「日本語表現1」（1年次前期開講）の受講前・後で、論証（「問3）自説の主張に適した根拠を探し提示すること」に関する意識の向上が確認できる。客観的な事実によって主張を裏づけるという姿勢を身につけたことが、「文献調査」の多層性につながっていると考えられる。

以上、初年次修了を迎える大学生の、レポート作成プロセスに関するスキプ的知識を確認した。この現状は、どう評価できるだろうか。レポート作成に関する著名な参考書である、井下(2019)『思考を鍛える レポート・論文作成法 第3版』を基準として考えたい(注3)。井下(2019:43)では、レポート作成のプロセスとして、表2のステップを提示している（一部改変）。

表2 井下(2019)によるレポート作成の5ステップ

ステップ1 論点を 見出す	提示された課題を理解する。テーマに関するキーワードを使って、思考を整理し、論点を見出し、下調べに入る
ステップ2 調べる	課題のテーマに沿って、流動的で新しい情報を収集 下調べ：論点の概略的知識を検索エンジンや事典で調べる 文献検索：OPAC、CiNii、新聞などデータベースで調べる 文献入手：資料を読み込み、さらに情報を収集
ステップ3 組み 立てる	論点を定め、問いを立てる。構造を組み立てるため、主題文を書く。アウトラインを作成する。仮の題名をつける
ステップ4 執筆	定型的な表現を用いたフォーマットを使って、執筆。題名を、キーワードとの整合性を考えて、つける
ステップ5 点検	自己点検評価チェックシートでチェック。できれば時間を置いて第三者的思考で読み返し、推敲

この5ステップと、学生が描く作成プロセス（図1）とを見比べると、異なる部分もあるが（後述）、どちらも、テーマについて知るところから始め、詳細な情報の探索に移り、取り扱う範囲を定め、文章の構想を練り、文章を作成し、そして推敲する、という流れは同じである。よって、学生たちは、おおむね模範的な作成ストーリーを描くことができ、また、大学での学修成果としてこの模範的ストーリーに近づくことができた、と評価できる。

だが、学生の実情はどうだろうか。以上の現状は、あくまで知識状態のことである。レポート作成プロセスの実情を探るための設問(5)の集計結果を報告する。図4に、設問(1)の回答として記述されたプロセス（図1の結果と同じ。記述者の割合は灰色のバーで示す。視認性の問題で数値ラベルは非表示）のうち、設問(5)で「(あまり)実践できていない」と回答のあったプロセスをカウントせずに算出した結果（黒色のバーで示す）を示す。

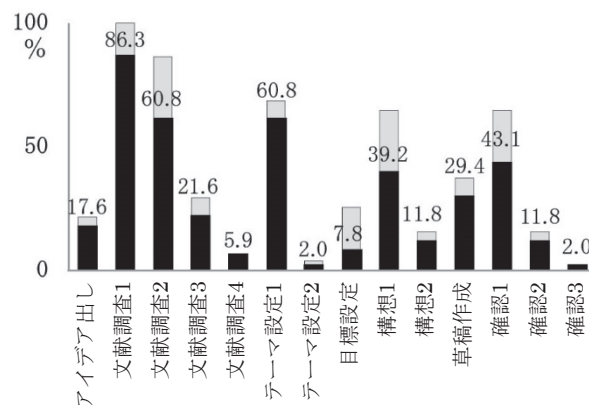


図4 学生の作成プロセスの理想と現実 (N=51)

理想と現実とのギャップが大きいのは「文献調査」(「1」で13.7ポイントの差、「2」で25.5ポイントの差)、「目標設定」(17.7ポイントの差)、「構想」(「1」で25.5ポイントの差)、「確認」(「1」で21.6ポイントの差)である。「文献調査」について、ギャップは大きいものの、実情としての割合自体は依然として高いように見える。だが、この結果は、大学生の文献調査を「多層的」であるとした評価の妥当性を揺るがすものである。図5に、文献調査の多層性に関する集計結果を示す。この結果は、図2の結果の集計において、「(あまり)実践できていない」と回答のあった文献調査プロセスをカウントせずに算出したものである。意識上は8割以上の学生が2段階以上の調査を想定していたが(図2)、実情は、2段階以上の調査を実施する学生は6割程度、1段階以下の調査が4割(「1段階の調査」と「十分な調査なし」の合計)で、さらにそのなかで1段階の調査もままならない学生が一定数存在するということが浮き彫りになった。

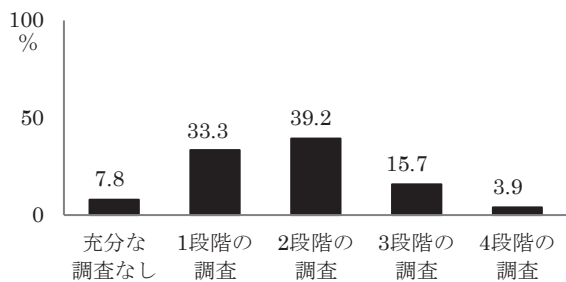


図5 文献調査プロセスの実情(N=51)

以上の、理想と現実のギャップの原因は何であろうか。ギャップが大きいプロセスは「文献調査」「目標設定」「構想」「確認」と様々であるが、「目標設定」の問題に他のプロセスの問題も起因すると考えられる。「目標設定」の成否は、他のプロセスの成否・進行に影響を与えるものである。学生の「理想」を見ても「現実」を見ても、「テーマ設定」はできるが、「目標設定」ができていない。これは、考察範囲の限定はできるが、問いの設定ができない、という問題として理解することができる。

学生は「問いを立てる」という意識に乏しい。問いを立てることは、レポート作成のプロセスのなかで一般的なものであるが(井下(2019)による5ステップ参照)、設問(1)の回答として、このプロセスを記述した学生はほとんどいなかった。「問い」「疑問」に言及した学生はおらず、「仮説」に言及した学生が1名(2.0%)ただけであった。「問いを立てる」ことにつながる要素として「問題」、「問題」の類義語としての「課題」に言及した学生は8名(15.7%)いたが、割合としては小さい。さらに、問いには〈探求志向〉の問いと〈解決志向〉の問いとがあるが、「問題」「課題」というワードは後者の問いにつながりやすい。つまり、学生は問いに対する意識に乏しく、

また問いの理解も一面的である可能性がある。

また、キーワードの定義に言及した学生も少数であり、このことも〈探求志向〉の問いに対する意識の低さと関係することだと思われる。アンケートの設問で設定した「レポート課題」は「若者」と「遊び」についてであった。「若者」とは誰のことか、「遊び」とは何のことか、というのは自明のことではなく、定義をする(確認する)プロセスが必要である。それにもかかわらず、定義に言及した学生は8名(15.7%)のみであった(該当の記述は「文献調査」でカウントしている)。「当たり前」に思える概念に検討を加えるという行為は〈探求志向〉の問いが生まれる原点であるが、これを意識している学生は少ないようである。

4. 今後の教育の指針

本研究では、初年次修了を迎える大学生がレポート課題に対してどのような作成プロセスを描くかについて、整理・分析をおこなった。初年次における学修の成果として、学生たちは、おおむね模範的な作成ストーリーをスクリプト的知識として有していることが確認できた。しかし、思い描くストーリーと、学生が実際に描くであろう軌跡とのギャップは大きいことも分かった。本稿では、この理想と現実とのギャップの根本原因が、「問いを立てる」意識の低さにあることを指摘した。

本学の学生は、2年次以降の学修のなかで「問いを立てる」プロセスの修得が必要である。「～は是か非か」「～という課題をどう解決するか」というような論争に目が向きがちな学生の視野を、〈探求志向〉の問いにまで広げることが重要である。文章作成のテクニックの1つとして逆算思考法(例:結論の内容を基準にして、本論の内容を取捨選択する)が有名であるが、よい目標設定ができなければそもそも逆算はできない。逆算思考法が機能する前提の能力を獲得することで、作成プロセス全体が効率化することが期待できる。

注

- 1 図のプロセスの配列は、必ずしも時系列順ではない。
- 2 「整理」「読解」「考察」は、7種類の作業プロセスとは次元の異なる思考プロセスであるため、除外した。「執筆」の記述の有無は、スクリプト的知識を測定する指標にならないため、除外した。いずれも回答数としては少数であったため、除外による分析への影響は小さい。
- 3 井下千以子(2019)『思考を鍛える レポート・論文作成法 第3版』慶應義塾大学出版。